光文社時代小説文庫

加賀騒動

長編歴史小説

村上元三

光文社文庫

長編歴史小説

加賀騒動

著者　村上元三

昭和61年1月20日　初版1刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　慶昌堂印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03 (942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Genzō Murakami 1986

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70290-2　Printed in Japan

光文社文庫

長編歴史小説

加賀騒動

村上元三

光　文　社

加賀騒動

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

鳶と鷹

火消同士が消口を争う、というのは珍しいことではないが、今日の火事のように、火消が三つ巴になって争ったのは、はじめての出来事であった。それも、公儀の定火消と前田家抱えの加賀鳶、おまけに町火消までが加わっての消口争いなので、肝心の火事が二の次になるような騒ぎになった。

享保十五年の、まだ松がとれたばかりの日で、去年から一ト月越しの旱天に続いて、それほど勢いは強くはないが、肌を凍らせるような北風が、朝から江戸の町に吹いていた。

火元は上野不忍池の西岸、茅町二丁目の町家で、炬燵の灰をごみ溜めに捨てたところ、まだ火が残っていて、ごみ屑が燃えはじめ、気がついた時には、羽目板から屋根の庇へ、もう火が燃え移っていた。

時刻は正午を廻ったばかりで、昼火事は人の眼につきにくいので大事になり易い、といわれるが、この日の火事も、騒ぎが大きくなって町火消が駈けつけてきたときは、火の手は、往還を南へ越えた茅町一丁目から教証寺を覆いつくし、湯島の切通しのほうへ押しよせていた。

風下には幕府の学問所の聖堂や神田明神があり、西のほうには水戸屋敷と加賀屋敷がある。おまけに、火事の起ったあたりから湯島、仙台堀へかけては旗本屋敷、公儀の組屋敷がいくつもあって、その間に町家が入り組んでいる、という簡単に火がかりの出来にくい場所であり、

火の手は大きくなるぞ、という予想が誰にもすぐに感じられた。

浅草蔵前から下谷広小路、池の端、神田明神下、本郷湯島へかけては、町火消八番組ほ、わ、か、たの四組の持場所なので、八番組の大纏四本を押し立て、頭巾に刺子で身を固めた鳶の者たち二百人ほどが「ありゃりゃ」と声をあげて火事場へ駈けつけてきた。

籠目の笠に将棋駒の形に八番組と書いた纏、打出の小槌の形のわ組の纏、その二本が真先に、雲のひくく垂れこめた空の下に馬簾をなびかせ、梯子、刺又、釣瓶、溜籠などの火消道具をかつぎ、煙をくぐって町鳶が飛び込んできた時、火と煙は湯島天神の境内を真黒に押し包み、うなりをあげて三組町の中間屋敷へ襲いかかっていた。

その風下のほうから足並そろえて散開しながら進んできたのは、お茶の水一帯を受持場所にしている公儀の定火消番、五千石の旗本久世三四郎を頭とする二百人ほどの一隊だった。この久世三四郎は、寛永のころの名高い暴れ旗本久世三四郎を祖父に持った男で、年配はもう五十に近いが、この泰平の世の中で祖父ゆずりの喧嘩好きな血を持て余しているので、こういう火事騒ぎになると、まるで戦いにでも出るように勇み立ち、鉞頭巾と火事装束に包んだ二十貫豊かなからだを、馬上で躍り上がり躍り上がり、顔を真赤にして力み返っている。

「町火消どもに消口とらすな。かかれ、かかれ」

と采配を打ち振り、あとに続く騎馬の与力六騎、徒歩の同心三十人、組下の火消中間百数十人ほどへ、勢い込んで下知をしながら駈けてくる。

もう龍吐水では火は消せない、と見たので、八番組の町火消たちは、妻恋町の町家に駈け上

って屋根瓦を引きはがし、家を鳶口で引き倒し、丸太で押し潰し、破壊消防に取りかかった。その一方で、八番組の大纏四本は、近くの町家へ立てかけた梯子をよじ登って、消口を取ろうと競い合った。

それと見た久世三四郎は、鞍の上にのび上がり、顔中を口にして喚き立てた。

「ええ、町火消が消口をとるぞ。それ、負けるな、かかれ」

こうなると、早く火事を消すことよりも、消口の一番乗りが当面の勝負になり、定火消番の中間たちは、町火消の立てかけた梯子を引き倒し、自分たちの梯子を煙に包まれた町家に押し立て、褌一本の素っ裸で屋根へ駈け登ろうとする。

「ガエンにひけを取るな」

と町火消たちも殺気立ち、そこ此処で、もう双方の小ぜり合いが始まった。

定火消の人足、いわゆる火消屋敷の中間は、市中ではガエンと呼ばれ、ごろつきが多いので、町家からは嫌われているし、自然、町鳶とは仲が悪い。

双方が睨み合っているところへ、半鐘、板木、人の叫び声などを圧倒して、どっと規則正しい足音を響かせ、火事場へ繰り込んできた五十人ほどの一隊があった。

指揮をとっているのは騎馬の侍で、鍔頭巾に火事羽織、赤地に金角つなぎの胸当をつけている。これは、加賀家一番火消の奥村長左衛門という武士で、あとに従うのは名代の加賀鳶だった。

大形の雲に稲妻を染め出した長半纏に、鼠色の頭巾、銀塗太鼓を型どった大纏を振って進む

のは、頭に目代、小頭などで、うしろから平鳶五十人ほどが、左腕に左足、右腕に右足と前後一様に揃えて押してくる。いずれも背丈は六尺以上、面つきのたくましい者ばかりを揃え、鬚は刷毛先をきれいに散らし、鬢は抜き上げてすき、額、茶色の地に斧の打っ違いの紋を染めた皮羽織、頭巾をかぶり、五尺の長鳶をさげて走ってくる有様は、さすがに加賀百万石が自慢の、つぶ選りの鳶の者だけあって、町鳶やガエンにはない一糸乱れぬ統制と格式を具えている。

「それ、火を消しとめよ」

と長左衛門の下知をする声に、ガエンと町火消の睨み合いには眼もくれず、加賀鳶は見る間に丁字形に陣を張り、いま消口を争っている町家の隣に梯子を打ちかけ、するすると纏持ちがそれを駈け上った。一方では龍吐水を三方から火へそそぎ、あざやかに働きはじめた。また二十人ほどは、押しよせる彌次馬を追い払い、梯子で垣を作って火事場へ近づけまいと、日頃の鍛錬を発揮した見事さであった。

加賀鳶は、本郷にある前田家上屋敷の防衛と、公儀の命で市中の要所へ消火に出動する、という仕事のほか、聖堂の火消役が加賀藩の任務でもあった。だから、風下にある聖堂を守るために繰り出したのだが、その一方では、町鳶や定火消を出し抜いて消口を取ってくれよう、という意地が、指揮者の奥村長左衛門や加賀鳶の者たちにも充分ある。

「加賀鳶か消口をとるぞ、おくれるな」

定火消番の久世三四郎は、それと見て喚き出し、いきり立って馬から飛びおりようとした。

ガエンと町火消の仲が悪いように、加賀百万石の威勢をかさに着る加賀鳶に対するガエンの

反感も、こちらが旗本の面目を背負っているだけに猛烈なものだった。

いま、わ組の纏持と屋根の上で揉み合っていた素っ裸のガエンたちは、頭から火の粉と煤を(すす)かぶった姿で、身をおどらせて隣(もう)の屋根へ飛び移り、いきなり手かぎを振りあげ、加賀鳶へ打ってかかった。

「何をしやがる」

「叩(たた)きのめせ」

血の気が多く、喧嘩っ早い事ではガエンに引けはとらぬ加賀鳶たちは、黒い煙に包まれ、足元へ火の舌が這(は)っている屋根の上で、これも長鳶をふるって打ち合いをはじめた。

「加賀鳶二番手(て)、消口」

と小頭が、揉み合う中で大きく叫んだとき、ガエンの二三人が飛びかかって銀塗太鼓の加賀家の纏に手をかけ、引き落そうとした。

「あとへ引くな、纏をとられるな」

屋根を伝って走ってきた加賀鳶が、足場の悪いところでガエンたちと揉み合ううちに、

「久世三四郎消口」

となりの屋根から、大きな声が聞えた。

久世鷹(くぜたか)といわれる鷹の羽を二枚ならべた紋を染めた纏を押し立て、久世の組下の同心二人ほどが、裸のガエンたちに守られて立っている。

それを見た奥村長左衛門は、あぶみを張って鞍の上に立ちあがり、血相変えて叫んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「お家の纏に手をかけられ、消口を奪われては前田家の恥辱だぞ。引くな、引くな」
こうなると、いままでの町火消とガエンの喧嘩は、ガエンと加賀鳶の争いに変ってきた。
三すくみのようでいながら、ふだんから仲の悪い大名火消と旗本火消の喧嘩になった以上、町火消の割って入る余地はなくなり、いつの間にか八番組の籠目や打出の小槌の大纏は、火と煙の渦からほかへ退いていった。
「加州家へ申し入れる」
と、烈火のようにいきり立った久世三四郎が、馬を煽って駈けよってきた。
「これは久世三四郎手の者にて押えたる消口を、横合いから奪い取る気か。理不尽な」
「理不尽は、そなた様でござろう」
と奥村長左衛門も、熱気で煽られた顔に青筋を立て、竿立ちになる馬の上から怒鳴り返した。
火を消すよりも、大名と旗本の意地にかけて、あとへは引けぬ角突き合いであった。

大槻伝蔵

喧嘩という興奮が手伝ったせいか、消口争いの破壊消防が功を奏したのか、火事はその妻恋町の町家で消しとめたものの、納まらぬのは定火消と加賀鳶の睨み合いだった。
屋根瓦は落ち、半焼けになった隣同士の町家の屋根に、銀塗太鼓と久世鷹の纏が、それぞれ押し立てられ、ガエンと加賀鳶が、めいめいの消口を守っていた。

焼け焦げた匂いのただよう往還には、まだ煙がたなびき、家からほうり出された家財道具が大掃除の最中のように折り重なり、遠巻きにした弥次馬が見物している中で、旗本の久世三四郎と前田家の奥村長左衛門が、まだ互いに先陣を争って論判を続けている。

町火消たちは、こうなれば大名と旗本の喧嘩、こっちの知った事ではない、と傍観者の立場で、それでも道に大纏を立てて成行きを見守っている。

「ただいまの争いにて、拙者の手の者にも怪我人が生じたが、家来の儀は苦しからず、ただ、上様よりつけられた天下の御扶持人も有る事ゆえ、組下の与力同心が承知せぬ」

と久世三四郎が、旗本という身分を楯にとって罵ると、奥村長左衛門も、

「それなれば、われらにも聖堂守護の役目にある加賀藩の面目がござる」

一歩もゆずらず言い返しているうちに、低い雲のようにただよう灰色の煙の下をくぐって、馬蹄の音が近づいてきた。

馬上の侍は、火事装束ではなく、騎射笠に馬乗羽織といういでたちで、徒歩の者五人ほどを連れている。

互いに馬上で言い争っている二人のほうへ駈けよると、その侍は馬から跳ねおりて、

「奥村氏、お控え下さい」

よく透る澄んだ声をかけてから、笠をとり、久世三四郎の馬前へ近づいた。

二十六七歳でもあろうか、面長で色の白い、眉も鼻筋も唇も優しい感じのする、ただ眼つきだけは鋭い、すらりとした長身の侍であった。

「久世三四郎様とお見うけ致しまする。わたくしは前田中将が家来、大槻伝蔵と申する者」
と小腰を屈め、いんぎんに、しかし卑屈な感じはない態度で名乗ってから、
「ただいまの事、あなた様のお手と、われら加賀の火消と双方同時に消口をとり、火を消しとめた、となされては頂けませぬか」
「しかし」
と言いかける三四郎へ、下から伝蔵は押しかぶせるように、
「あなた様お手の者、また加賀藩の火消、それに町火消、三方ともに怪我人も出しました事ゆえ、大公儀お使番、お目附などのお出張りと相成っては、この上の怪我人が出るやも計り知れませぬ。われらの無礼、改めてお詫びにまかり出ますゆえ、本日のところは何卒」
対手に一言もいわせないほど流暢な言葉づかいであり、その落着き払った態度を見ると、久世三四郎も反感を覚えるのとは逆に、やっと自分も冷静を取りもどしてきた。
大槻伝蔵という侍の態度が、明るく素直であり、好感が持てるのが、三四郎に自分の立場を省みさせるだけの余裕を与えた。このまま意地になって加賀藩と争っても、先方や自分の組下に怪我人が出た以上、使番や目附に割り込まれては事が面倒になる。いや、その面倒な事も、加賀百万石を向うに廻してならやり甲斐があるというものだが、いま大槻伝蔵のいったように、双方同時に消口を取ったとすれば、意地の立たぬ事もない。
祖父とは違って、いくらか泰平の世に慣れて打算の働くところもある久世三四郎は、伝蔵のいう通りにしたほうが有利だ、とさとった。

「堪忍なり難いところだが、そのほうの扱いに免じて、勝負は互角という事にしてくれよう」
それだけいって久世三四郎は、馬首をめぐらし、湯島のほうへ引き返していった。
三四郎の退き際が鮮やかだったので、奥村長左衛門は、いきり立っている鼻の頭を叩かれた心地になり、
「大槻、出すぎた振舞いすな」
と、こんどは伝蔵を睨みつけた。
奥村は、前田家一番火消という役目は兼役で、本役は大小将組四百石取の身分であり、伝蔵に対しては、この成上り者が、という反感が強い。
加賀の前田家には、前田土佐をはじめ八家といわれる名門があり、横山、本多、長、奥村、津田、玉井などの老臣が、代々重役の地位についている。この奥村長左衛門は、八家の中の奥村内匠の一族であり、自分は名門、大槻伝蔵のような禄高二百三十石の組外組、いくら当主の加賀吉徳の信任が厚いといっても、茶坊主上がりの若侍などに出すぎた振舞いをされては、という怒りがあった。
「文字通り火急の場合ゆえ、ご容赦を願いまする」
と伝蔵は、奥村の怒りを、ふわりと微笑で受け流して、
「それより怪我人の手当、火事場の跡始末が肝要かと心得ます」
「おぬしの指図は受けぬ」
伝蔵より二十歳も上という自分の年も忘れ、子供の喧嘩のような怒り方をしている奥村をそ

のままに、
「奥村どのにお下知を受けよ」
と、加賀蔦を率いてきた侍たちに声をかけながら、自分は袴の股立をとり、てきぱきと怪我人の始末をはじめた。
定火消の同心やガエンたちの怪我人は、久世三四郎が勝手にやるとして、加賀蔦の中にも喧嘩で傷をうけた者が八人、火がかりで火傷や打撲傷を負った者が十人ほどもあった。
伝蔵は、気を利かして藩医の中村正伯も連れてきていたので、それぞれに応急の手当をさせ、歩ける者はともかく、身動きも出来ぬ者は近所から借りさせてきた戸板に乗せ、手まわしよく加賀屋敷のほうへ送り返した。
八番組の町火消は、火の消えた火事場にまだ残って、消口は取れなかったにせよ、家を焼かれた町家の者たちの世話や、立退き先の面倒を見るなどという仕事に当っていた。
それを見ると、伝蔵は、藩医を連れて、町火消の固まっているほうへ引返していった。
「怪我人はおらぬか。そのほうたちの者の中にも傷をうけた者がおろう。手当をしてつかわすが」
声をかけると、五十年配の頭取と見える男が、むっとした顔で進み出た。
「か組の頭、音右衛門と申す者でございます」
と名乗ってから、煤と汗で汚れた顔に怒りの色を浮べながら、
「わっち共の怪我人は、わっち共で手当を致します。それよりも、とばっちりをうけて怪我を

した娘さんがおりますから、見てやっておくんなさいまし」

そういって指さした向うに、町鳶たちに囲まれた中から、女の泣声が聞えていた。

伝蔵は、そのほうへ近よっていった。

ごった返した火事場の焼跡に、これは花が咲いたように、十七八の町娘がひとり、四十年配の女に抱えられてうずくまっている。

泣いているのは年配のほうの女で、娘は気を失っているらしい。仰向けになった顔から血の気が引いて、髪や着物は火の粉をかぶったのだろう、汚れ乱れている。右の足を、へんな風に曲げて、まるで息をしていないように見えた。

「お貞ちゃんや、しっかりするんだよ。お貞ちゃんや」

女は、しきりに娘の身体をゆすぶって、泣きながら声をかけるのだが、それも聞えないのか、ぐったりとしたまま娘は返事もしない。

「どうしたのだ」

伝蔵は、女に声をかけた。

いきなり侍にそういわれて、女はびっくりしたらしいが、まわりの町鳶たちにはげまされ、やっと震えながら涙声で答えた。

女はおせんといって、いまの火事で焼けた妻恋町の長屋に住んでいる者で、亭主は吉蔵といい、三組町のお駕籠の者、長屋の中間、自分は針仕事をして暮している。この娘は、姪に当るお貞といって、自分の兄で芝浜松町に八百屋渡世をしている伊兵衛の姉娘だが、昨夜から泊り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton